

## 研究主題

## 現代文教授法の研究

～「型」を通して文・段落・文章の骨組みを明らかにする評論文の指導～

**要約：**評論文を苦手とする生徒のために評論文を論理的に読むことに焦点を当てて、評論文を読む際に意識すべき「型」を提示し、それに沿って文章の骨組みとなる各段落の中心文を探し、要約を書くトレーニングをしたところ、評論文の論理の展開や要旨が掴みやすくなり、評論文が読みやすくなることが分かった。

**キーワード：**評論文、「型」、段落の中心文、要約、論理の展開、要旨

## I 主題設定の理由

評論文の授業をしている時、「ことばとしては分かるけれども、結局、何が書いてあるのか分からない。」という生徒の嘆きを耳にした。日常生活で、使っている日本語なのに、評論文となるとうまく読めない。生徒たちは、現代文はフィリングで解く科目だと思い、「自分はセンスがないから国語はダメだ。」と諦めていた。

もちろん、読み方は人それぞれに個性的であってよい。しかし、文章を読む第一段階として大切なのは、書いてあることをできるだけ正確に、読み手の個性や主観を交えずに読み取ることである。その次に、それに対する解釈があり、最後に個人独自の見解・意見がある。

人間が文章を書くのは、異なる立場や考えを持つ不特定多数の他人に自分の考えや思いを伝えるためである。そして、評論文が自分の主張を正しく理解してもらおうための表現手段であるなら、それを正しく受信するための「型」があってしかるべきである。そこで「型」を通して文・段落・文章の骨組みを明らかにする評論文の指導法を考えたいと思った。

## II 研究の目的

評論文を読むための「型」を提示することにより、評論文を論理的に読めるようにする。

## III 内容と方法

各種調査結果から生徒の現状を正しく把握し、それらを踏まえて評論文を読むための「型」を提示する。その後、授業で「型」の有効性を検証し、最後に今後の課題を記す。

## IV 在籍校生徒の現状

## (1) PISA調査の結果から

2003年調査読解力問題の分類と正答率・無答率

問題の名称	問題の分類				日本-OECD		
	問	タイプ	テキストの形式	読解のプロセス	出題形式	正答	無答
イソップ物語	1	物語	連続	解釈	多岐選択	-5.6	-1.2
ライオン	3	解説	連続	解釈	多岐選択	-6.3	-1.6
イソップ物語	3	物語	連続	熟考・評価	自由記述	-1.0	13.1
薬物を与えられたクモ	4	解説	連続	解釈	自由記述	-18.4	15.2
薬物を与えられたクモ	3	解説	連続	解釈	自由記述	-6.6	9.3
南極点	5	解説	連続	解釈	多岐選択	-14.3	-1.3
薬物を与えられたクモ	2	解説	連続	熟考・評価	自由記述	-0.2	15.1
交換留学	2	解説	連続	熟考・評価	自由記述	5.2	19.0

(『生きるための知識と技能(2) 2003年調査結果報告書』(国立教育政策研究所))

2003年PISA調査の結果から、日本の生徒は連続型テキストの「解釈」における「多岐選択」、「自由記述」で正答率が低く、連続型テキストの「熟考・評価」、「解釈」における「自由記述」では無答率が高い。

PISA型読解力の低下に対しては、問題点を二つに分けて考える必要がある。正答率が低い問題への対策と無答率が高い問題への対策である。鈴木一史氏は「記述問題に白紙が多いのは、『読解力』問題以前に学習意欲や、国語の問題に対する苦手意識の強さも大きく影響しているのではないかと指摘している<sup>\*)</sup>。対策として、国語に対する学習意欲を高め、苦手意識を克服する指導がまず必要である。

正答率が低い連続型テキストの「解釈」に対して、前述の鈴木氏は「一つ一つのことばの意味を捉えるあまり、それらを総合して全体化して物事を読み取ることができない」ために、この問題の正答率が低かったのではないかと述べている。対策として、まず文章の骨組みを大きく掴み理解する力を付ける指導が必要である。

## (2) 石川県基礎学力調査の結果から

平成15～17年度と年度を追うごとに読解力が低下している。少なくとも平成17年度の調査を受けた現高校1年生は、中学3年生の4月の段階で「文章全体を把握する力」が、かなり不十分な状態であったと言える。

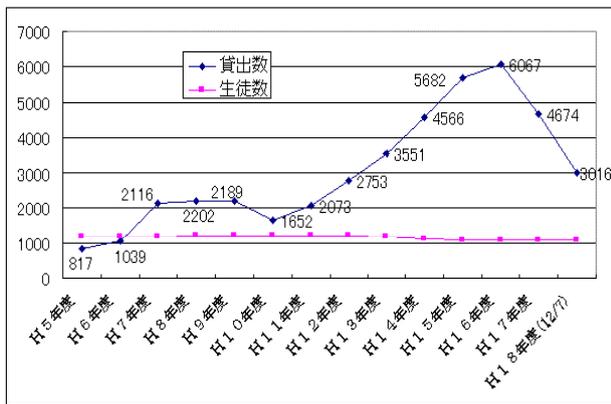
## (3) 在籍校図書館の利用状況から

PISA調査の読書に関する調査結果を見ると、読書を趣味とすると答えた生徒の読解力の平均得点の方が読書を趣味としないと答えた生徒の平均得点よりも、51点高い。この結果から、読書量と読解力の平均得点の間には正の相関関係があると言える。そこで、在籍校の図書館の利用状況から生徒の読書量を調べてみた。

平成16年度までは、図書館の貸出数が順調に増加していたが、17、18年度と年度を追うごとに減少してきている。図書館司書の先生に伺ったところ、これは全県的な傾向であるとのことであった。

かつては、現代文を読むために必要な「型」のようなものは、豊富な読書経験によって、自然に体得され、無意識にその「型」を組み合わせながら文章を読んでいたのであろう。しかし、読書量が減少すれば、読書の中から自然に身に付けていた読むために必要なさまざまな「型」を、身に付けられないままの生徒が増えてくるのが考えられる。もちろん読書量を増やすための読書指導も大切である。しかし、読むための「型」を提示することにより、現代文の論理的な読み

方を指導することも必要である。



#### (4) 在籍校の模擬試験の結果から

2006年7月と11月の模擬試験における評論文の結果を見ると、評論文全体の要旨把握問題ができない生徒は、「指示語」等の文脈把握力を問う問題もできていない。つまり、評論文の要旨を把握することに影響するのは、論理の展開に沿って文脈を把握していく力である。このことから、要旨を把握するには文脈把握力が必要であることが分かる。

### V 評論文を読むために必要な「型」

#### (1) 学習指導要領における「読むこと」及び「言語事項」

現行学習指導要領「国語総合」における、「読むこと」には「要約」が、「言語事項」には、「文や文章の組み立ての理解」「口語のきまり」が記されている。「現代文」における、「読むこと」には「論理の展開や要旨を的確にとらえること」が記されている。

では、具体的にはどのようにして「文や文章の組み立ての理解」を深め「論理の展開や要旨を的確にとらえ」ていくのが効果的だろうか。

#### (2) 先行研究

読むことの技術面に焦点を当てた書物を通して、読みを二つに分類することを学んだ。一つは、想像力を働かせて自由に読む、情緒的・感性的な読み方である。これは、人格を陶冶したり豊かな想像力を育んだりする。もう一つは、大学で専門書や論文を読んだり、社会に出てから、説明書や報告書を読んだりする場合に主として必要とされる論理的な読み方である。これは、「読解力向上に関する指導資料」(H.17.12 文部科学省)に書かれている「論理的・説明的文章において、的確に論理を読み取る」読み方で、可能な限り主観を交えず、その文章の要旨を的確に読み取る必要がある。

ここでは、後者の読み方にスポットを当て、先行研究から「読む」ために必要な技術を見てみた。文章の骨組みとなっているのは各段落の中心文である。そのため、各段落の中心文が正確に掴めれば、文章が大きく掴める。そこで、文章を論理的に読むためには、客観的に各段落の中心文を把握していく必要がある。つまり、文章読解の第一歩は、段落を一つのまとまりと見て、文章を支える骨組みとなっている各段落の中心文を探すことにある。

中心文を見つけるための具体的方策として、段落内の各文の働きを考える必要がある。段落

には段落の中心文と、それを支えているその他の文がある。その他の文とは「サポーター・センテンス」、「論理関係明示子」、「締めくくり文」、「パラグラフのベクトル」<sup>2</sup> 等である。これらを意識しながら読むことにより、客観的に段落の中心文を探していくことができる。

#### (3) 周辺研究（日本語教育を中心に）

近年の日本語学習者数の増加はめざましいものがある。それに伴い日本語教育における研究成果もめざましい。そこで、その中に評論文を読むための「型」として役立てられる項目がないか検討してみた。

##### ① 文型

文型文法シラバスに基づく日本語教育では、文法ではなく文型で日本語を教える。その中で「X be A.」と同じであると教えられる日本語の文型に「XはAである。」がある。これは評論文においては、命題を表す形として使われる。

##### ② ノダ文

「のだ」、「のである」は、日本語教育では「関連づけ」と呼ばれる。その中で評論文でよく使われるのは「理由」と「言い換え」の「ノダ文」である。「ノダ文」は、普通の日本語が前から後ろへと流れるのに対して、後ろから前へとという逆方向の説明になるため、評論文を読む時に見落とされがちなので、注意する必要がある。

#### (4) 評論文を読むために必要な力

評論文を読むために必要な力として、以下の4つが考えられる。

##### ① 「語彙力」

現代社会を理解する上で欠かせない語や抽象概念を表す語の知識である。これは、ある程度、辞書等によって解決できるもので、自分で努力し身に付けていくことが可能な力である。

##### ② 「背景知識」

文章の背景に関する文化・芸術・哲学・思想・社会科学・自然科学の分野の知識である。書かれていることそのものの難しさについては、その事柄に対する専門的な知識を勉強する必要はある。このさまざまな分野に関する専門的な知識は、全ての教科にかかわるものであり、現代文の授業のみで付けることは難しい。

##### ③ 「抽象能力」

抽象文を自分で具体化し、自分のことばにして理解していく力である。抽象的なものを具体化するには論理的思考力が必要である。具体と抽象とを行き来する論理的思考力は全ての教科で付けるべき力である。

##### ④ 「構文力」

文章を大きく掴むために必要な文・段落・文章の骨組みを把握する力である。上記の①～③に対して、構文論的な事柄が原因の文章の構造に関する難解さは、国語力の基本となるものができることによって、かなり解消することができる。たとえば、抽象度の高い文でも、前後の文脈からおおよその意味を掴むことができれば、難解な部分も理解することは可能である。

#### 〈文・段落・文章の骨組み〉

- ・ 文の骨組み＝一文の「主語－述語」
- ・ 段落の骨組み＝段落の中心文とその他の文
- ・ 文章の骨組み＝各段落の中心文

## (5) 評論文を読むために必要な「型」

文章を客観的に読むということ考えた場合、名詞の意味は多義的なので客観性がなく、それを一つに規定するのは文脈の力である。それに対して、指示語や接続語のように働きが決まっています。誰もが同じように使うことばを押さえて読むと文章が客観的に読める。そこで、「構文力」の中で文脈把握に力を発揮するものとして、まず、指示語・接続語が挙げられる。さらに、文章全体を大きく掴むためには、対比構造・キーワード・中心文の把握も必要である。

### 《評論文を読むために基本となる読みの「型」》

- ① 指示語
- ② 接続語(逆接語)
- ③ 接続語(換言語)
- ④ 対比構造
- ⑤ キーワード

この①～⑤を評論文を読むための「型」として使い、文章の骨組みである中心文を探す。

#### ① 指示語

##### 〈まとめの指示語〉

「このような」、「このように」、「このことは」、「こうして」等

指示語の中でも特に、前の内容を大きくまとめて、もう1度述べる時に用いる「まとめの指示語」に注目する。具体例の後の「まとめの指示語」で始まる段落は、抽象的なまとめになっている。つまり、段落の初めにこの語が置かれていると今までの話のまとめであり、部分的な結論が述べられている。このまとめの指示語が、最終段落にあればその段落は文章全体の結論(=要旨)を示している。

#### ② 接続語(逆接語)

##### 〈逆接語〉

「しかし」、「けれども」、「だが」、「ところが」、「にもかかわらず」、「逆に」、「反対に」、「これに反して」等

接続語の中でも、逆接の接続語に注目する。評論文は一般論に対し、筆者独自の考えを述べるものなので、一般論を述べた後に、自分独自の考えを述べる形が多くなる。そこで、接続語の中でも特に逆接語の後に注目することで筆者の主張が掴みやすくなる。また、「確かに(もちろん、なるほど)A、しかし(だが、けれども)B」も評論文にはよく使われる構文で、Aには一般論が、Bには筆者の主張が書かれている。

#### ③ 接続語(換言語)

##### 〈換言語〉

A、すなわちB、言い換えればC、いわばD、つまりE、要するにF、結局G。等  
(A=B=C=D=E=F=G=筆者の主張=大切)

接続語の中でも、換言の接続語に注目する。換言の接続語の前後では、同じ内容が繰り返される。これは、筆者が大切だと思っているからこそ、何度も表現をかえて、同じ内容を繰り返し説明しているものである。換言語の後に注目すれば筆者の主張を掴む手がかりになる。言い換えの「ノダ文」は、換言語が省略された形である。そこで、文末に「～のである(のだ)」

の形を持つ文にも注意する必要がある。

#### ④ 対比構造

二項対立	→	二つの事柄(概念)の対比
(例)		
有機的	↔	無機的
帰納	↔	演繹
自然	↔	人為
必然	↔	偶然
抽象	↔	具体

対比の一方を捉えることができると、対比されているもう一方が捉えやすくなる。そこで何と何が対比されているのかという二項対立を意識して文章を読むと、文章の構造がすっきりと見えてくる。二項対立は思考の基本である。

#### ⑤ キーワード

- ・段落の中心的内容に強くかかわることば
- ・文章中で繰り返し使われることば

キーワードは、段落の中心的内容に強くかかわり、文章中で繰り返し使われることばである。キーワードの連鎖に注目すれば、文章に述べられている内容を大まかに掴み、筆者の主張を捉える手がかりになる。

#### 《中心文》

- ・段落・文章の中心となる文
- ・抽象度の高い文
- ・段落、文章の始めか終わりに置かれることが多い

中心文は、段落・文章の中でより抽象度の高い文である。多くは、段落や文章の始めか終わりに置かれている。段落の中心文を押さえて読むことで、文章の骨組みが掴める。各段落の中心文を叙述の順序に従ってまとめると、文章の要約ができる。

## VI 授業実践

### (1) 単元名

評論(2) 科学と世界観(『精選現代文』明治書院)

### (2) 対象

普通科 (文系)

### (3) 指導にあたって

#### ① 学習内容





---

\*1 鈴木一史  
\*2 中沢